ジャコウネコの身体測定

PepperBox

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジャコウネコの身体測定

【Ｎコード】
Ｎ６５２５Ｚ

【作者名】
ＰｅｐｐｅｒＢｏｘ

【あらすじ】
銀河の希少生物であるヴェリア族――通称「宇宙ジャコウネコ」ひょんなことで、そのうちの一匹・グレンを飼い始めたトリスだが、飼ってから半年目に身体測定をしなければならなくなり……。

――――――――――――――――
Ｊ・ＧＡＲＤＥＮ３１で無料配布した本に収録した小説です。
発行はＰｅｐｐｅｒＢｏｘ。文章を書いたのは神無月ふみですが、キャラとストーリーは二越としみ＆神無月ふみという、変則的な合

作です。よろしければサイトのほうにもおいでになってください。
ｈｔｔｐ：／／ｐｅｐｐｅｒｂｏｘ２０１０．ｂｌｏｇ１０３．ｆｃ２．ｃｏｍ／

1（前書き）

Ｊ・ＧＡＲＤＥＮ３１で無料配布した本に収録した小説です。
発行はＰｅｐｐｅｒＢｏｘ。文章を書いたのは神無月ふみですが、
キャラとストーリーは二越としみ&神無月ふみという、変則的な合
作です。よろしければサイトのほうにもおいでになってください。
ｈｔｔｐ：／／ｐｅｐｐｅｒｂｏｘ２０１０．ｂｌｏｇ１０３．ｆ
ｃ２．ｃｏｍ／

1

1

「なあ、トリス。お前があいつを飼い始めて、もう半年だ。そろそろ本格的に、あいつの身体検査をしたいんだが、いいか？」

久しぶりにトリスが早帰りをしようとしたとき、シラクサが、トリスの研究室に訪ねてきた。

トリスは持っていた鞄を、机の上に置く。

あいつとはトリスの家で飼っている、宇宙ジャコウネコのグレンのことである。

半年前この惑星に、危険な宇宙生物が持ち込まれたとの情報が入った。

騒ぎの末、その生物が全宇宙でも貴重な「宇宙ジャコウネコ」だと判明した。そして惑星生物学者のシラクサの手配により、何故か微生物学者のトリスが保護という名目で飼うことになってしまったのである。

トリスは眉を寄せる。

「本格的な身体検査といっても、どうやってするんだ。グレンを専門の機関に預けようとしても、おそらく本人が抵抗するぞ。あいつは『宇宙ジャコウネコ研究所』の名前を聞いただけで、怯えてベッドから出て来なくなるからな」

「心配するな。俺がお前の家に行って、あいつの検査をしてやるよ」

シラクサは、にやりとした。

シラクサは隻眼で、無精髭を生やしている金髪の男である。大学帰りのラフな格好のせいで、いまは学者というより宇宙の密売業者のような風体だ。

もっとも学者らしくない外見と言うなら、トリスも同様である。

薄紅がかった長い銀髪を高い位置で結い上げている美貌の青年だ。

安全キャビネットの中で微生物をいじっているより、撮影スタジオでモデルをしているほうが似合いそうである。
「シラクサ。お前の専門は宇宙ジャコウネコじゃないだろう？　大丈夫なのか？」
「どんな動物でも身体検査ぐらいはできるぜ。動物なんてものは、どれも似たようなものだからな。しかもグレンは、ほとんど人型だ」
シラクサは平然と続ける。
「グレンの研究所嫌いは、研究所の人間も知ってるからな。専用の機械を、向こうから送りつけてきたぜ。俺に代わりに調べて報告してほしいそうだ。ま、俺もいろいろと興味があるしな」
「なんだ、もう話がついているのか。だったら俺の了解を取るまでもないだろう？」
「そう言うな。あいつはお前の言うことしか聞かないんだ。お前に反対されたら、いくら準備を整えていても、何もできないんだぜ」
シラクサは苦笑いする。
「実際問題、俺も研究所に連れて行くより、お前の家で検査したほうがいいと思っている。なんたって、あいつは宇宙ジャコウネコだ。移動させていて周囲にバレたら大ごとになる。猛獣が出たとパニックになるのも困るが、よからぬことを企む奴らに、居場所を知られるのも避けたい。そのためにもお前の家で検査したほうがいいだろう。そういうことだな」
シラクサの言うことは、何から何まで正論だった。
「じゃあ、明日寄らせてもらうから、頼んだぜ」
シラクサはトリスの研究室から出て行った。
トリスは、さきほどの話を反芻する。
宇宙ジャコウネコどころか、普通のペットさえ飼ったことのないトリスが、グレンを飼うようになったのは、裏でシラクサや宇宙ジャコウネコの研究所が動いたせいだ。
最初は自分に育てられるか不安で、研究所に返そうと何度も思った。しかし半年経ったいまでは、このまま飼い続けてもいいとさえ

思っている。
――グレン自身が病的に研究所を嫌がっているしな。
研究所に行きたくないと涙目で、すがってくる様子を思い出すたびに、自分が飼い続けるしかないと思う。これが一度拾った者としての義務だ。
そして飼い続けるためには、研究所の意向を無視するわけにはいかない。
――だから検査ぐらい、好きにさせてやるさ。シラクサならば、グレンにひどいことはするまい。
トリスは、下ろしていた鞄を持った。
グレンには検査と言わず、シラクサが遊びに来ると言えば大丈夫だろう。好物の夕食を作ってやって、そのときにでも切り出せばいい。
好き嫌いのないグレンに、どの好物を作ってやろうか考えながら、トリスは自分の研究室をあとにした。

2

次の日、シラクサは大きな旅行用カートを引いて、トリスの家にやってきた。
グレンに会うなり、目を細めて笑う。
「よう、久しぶりだな。元気だったか？」
「全然久しぶりじゃないですよう。シラクサせんせいは、このあいだも遊びに来て、おれのソテーを食べました」
むくれるグレンの頭を、シラクサは笑いながらなでた。
グレンは上目遣いで恨めしそうに見ながらも、ズボンから出ている黒くて長いしっぽを、ゆっくりと動かした。
ネコそっくりな黒く尖った耳も、シラクサがなでやすいように、少し寝かせている。どうやら心から腹を立てているわけではないらしい。

宇宙ジャコウネコの正式名称は「ヴェリア族」である。
黒髪の人間に、ネコの耳としっぽをつけたような姿をしており、ジャコウネコより人間の子供に似ていた。
特定の条件下で、身体からジャコウに似た不思議な液体を出すので乱獲が進み、絶滅危惧種になっている。
トリスの家にいるグレンは、その貴重な一匹だ。
グレンは不機嫌そうな口調で続ける。
「シラクサせんせいは、いつも、おれのごはんを食べます。よこ取りします。トリスせんせいが、つくってくれたソテー、すごくおいしかったのに。おかげで、おかわりができませんでした」
「おいおい、あれだけ全部一人で食うつもりだったのか？　ブクブクになっちまうぞ」
「ぶくぶく、ですか？」
「そうとも。そして太ったねこは、肉にされちまうんだ。今度はお前がソテーにされる番だな」
「ひい」
グレンは小さく飛び上がったかと思うと、トリスに駆け寄る。
「トリスせんせい、本当ですか？　ふとったねこは、ソテーですか？」
「ソテーにはされないが、食い過ぎは身体によくない」
あんまり、うちのねこを驚かせるな、と言うつもりで、トリスはシラクサを睨んだ。
シラクサは意地悪く微笑みながら、トリスとグレンを見ている。
グレンは寂しそうに言う。
「おれ、昨日もせんせいのつくってくれた、おいしいごはんを、おかわりしてしまいました。チキンは、だいすきなのです。あぶらがいっぱい、のっていました。おいしかったのです。おれは、ぶくぶくになるんでしょうか」
トリスの代わりに、シラクサが答える。
「ブクブクかどうか、俺が調べてやるよ。今日は、そのつもりで来

たんだ」
「な、なにをするですか。じ、じっけんですか？　おれのしっぽを切って、しおづけにするですか？」
グレンはトリスの身体にしがみついたまま、離れない。
トリスは安心させるように、グレンの頭をなでる。
「お前の身体が元気かどうか、ちょっと調べるだけだ。俺もシラクサも年に二回、大きな検査をするんだが、それと同じだよ」
「そうですか。せんせいとおなじだったら……だいじょうぶ、ですよね？　せんせいはさいしょから、しっぽがないけど、あしのゆびとか、しおづけにされてないし……」
「大丈夫だ。シラクサが、もしもお前のしっぽを塩漬けにしそうになったら、俺が止めてやる」
「……あんしんしました」
グレンはトリスを見上げ、にっこり笑った。
「よし、そうと決まったら、さっさとやるか」
シラクサは、リビングの机と椅子を部屋の端に寄せた。
身体検査の間、トリスは、持ち帰った仕事を片付けながら、グレンたちの様子を見守ることにする。
シラクサは旅行用カートを開いた。

2

仰々しい機械が一つ入っているのではない。動かないように型に嵌められた小さな機械がいくつも並んでいた。
その機械の一つ一つに役割があるのだろう。実験器具にはほど遠い、ただの玩具に見えるせいか、グレンも興味深そうに覗いている。
「まずは、これだ。グレン、服を脱げ。パンツは履いていていいぞ」
グレンは言われたとおりにした。シラクサは笑顔で、ＩＣレコーダーのようなものをグレンに向ける。
「なんですか、これ」
「お前の身長と体重、その他、身体のあらゆるサイズを測るものだ」
「まえに、はかったときは、ぜんぜんちがう機械をつかいましたよう」
「新しくいいものを貸してくれたんだ。これからは、こいつを使う」
言いながらスイッチを押すと、軽やかな電子音とともに、緑色のランプが点滅する。
「今度は横を向け。……次は後ろだ」
シラクサの指示に従うたびに、ピピピと音がする。
グレンは目を輝かせた。
「シラクサせんせい、おれも、やりたいです」
「駄目だ。大事な機械なんだぞ。遊び道具じゃない」
「でも、やりたいです、やりたいです。おれ、シラクサせんせいを、はかります」
「宇宙ジャコウネコのデータしか入れてはいかんことになっているんだから、駄目といったら駄目だ。――その代わり、こっちを触らせてやる」
シラクサは機械のグローブのようなものを取り出す。
「これを腕に嵌めるんだ。別に噛みついたりしないから、心配するな」

グレンはグローブに、恐る恐る手を入れた。
シラクサが親指の部分にあるスイッチを押すと、グローブについていた様々な色のランプが、一斉に光り始める。
「シラクサせんせい！　惑星ベンテルマンがアトミックパンチを出すときみたいです！」
グレンは目を輝かせた。
惑星ベンテルマンとは、グレンが好きな子供向けテレビ番組である。正義のヒーローのベンテルマンが、人々を守って戦う話で、必殺パンチを繰り出すときに、手が光るのだ。
シラクサは指についているボタンを押しながら説明する。
「これはお前の身体の組成を調べるものだ。……ふむ、お前が見かけより軽く感じるのは、そういう組成だからか。やはり宇宙ジャコウネコは興味深いな……」
手の甲にある表示画面を見ながら、シラクサは呟いた。
「シラクサせんせい、おれ、これが欲しいです。これをつかって、おれは正義のためにたたかいます」
「戦わなくていい」
シラクサが返事をする前に、トリスが、きっぱりと言った。
「あの番組を見るたびに、ヒーローになりきったお前が飛び跳ねるんだ。これ以上暴れられるのは困る」
「……あい」
グレンは、うなだれた。シラクサは笑いながらグローブを外す。
「こいつも借り物だから、お前には、やれねぇんだ。今度トリスにベンテルマンのおもちゃでも買ってもらえ」
トリスは仕事の手を止め、シラクサを睨む。
「駄目だ。買わないぞ。前に暴れたときは、跳ねすぎたあげく滑って、あやうく床に頭をぶつけるところだったんだからな」
「も、もうあばれませんよう。こんどあばれたら、ベンテルマンを見ちゃダメって言われたから……。おとなしく見るですよう」
シラクサは次々と機械を出し、グレンに試した。グレンも、おも

ちゃで遊んでいる感覚で、楽しくつき合っている。
――この調子なら、あっさり終わりそうだな。
トリスは安堵する。
シラクサの研究室の人間が何人もやって来て、仰々しい機械の前にグレンを立たせるところを想像して、気が重くなっていたのだ。
少し前に血液検査もしたが、採血キットを見ただけで、違法に売買されていた時代を思い出したらしく、涙目になっていた。
それだけに、笑顔で喜んでいるグレンを見ると安心する。浮かれて飛び跳ねる程度のことは、今日だけは大目に見てやるべきだろう。
「さあ、次は触診だ。グレン、ソファの上に寝ろ」
「あい」
グレンはシラクサの言うとおり、寝転がって手足を伸ばした。
「まずは、腹から触るからな」
「はら？」
不思議そうな顔をしていたグレンだが、シラクサに触られた瞬間、奇声を上げる。
「にゃにゃーっ！」
グレンは飛び起きて逃げようとした。
だが先にシラクサがグレンの身体を押さえる。
「おい、どうしたんだ。ただ、触っただけだぞ」
「だ、だめ……おなかは、だめです……っ」
グレンは首を、ぶんぶんと横に振る。
「トリスせんせい……た、たすけて……たすけて……！」
予想外のなりゆきに、トリスはグレンの味方をすべきか、シラクサの味方をすべきか悩んだ。
その間も、興奮したグレンが全力で暴れる。
「こ、こら、暴れるな！　引っ掻くなって。ちょっとだけだから、我慢しろ！」
「い、いや……っ、にゃっ、にゃにゃー！」
腹を触られることに嫌な思い出があるのか、それとも種族的に腹

を触られることを嫌っているのか分からない。ただグレンの暴れようは、尋常ではなかった。
　トリスはグレンの身体を、あちこちなでたことはあるが、腹だけをしっかりと触ったことはなかった。いま考えると、グレンは腹を触られないように、さりげなく動いていたのかもしれない。
　シラクサは焦り声で言う。
「おい、トリス。すまんが、こいつの手足を押さえていてくれ！こんなに暴れられちゃ、何もできん。かといって診ないわけにはいかん。お前も俺じゃなくて宇宙ジャコウネコの専門家を呼ばれたくないだろう？」
　確かに「見るからに研究所の人間」が来たら、グレンがどういう反応をするか想像したくなかった。
　このままではシラクサが、興奮したグレンに噛まれてしまう。
　宇宙ジャコウネコは、見かけの愛らしさからは考えられないほど、獰猛な猛獣になることがある。実際グレンは、以前飼い主を噛み殺したことがあった。
　だから押さえていないと大変だということは分かる。
　――だが……。
　トリスはグレンに近づき、傍らに座った。
　そして手足を押さえる代わりにグレンを、そっと抱きかかえる。
「せんせい……？」
　グレンは暴れるのをやめた。そのままトリスはグレンを膝に乗せ、後ろから、ぎゅっと抱きしめる。
「お前をいじめているんじゃない。ここで一緒に暮らすために、必要なことなんだ」
　グレンの耳が、ぴくぴくと動く。一生懸命に聞いている証拠だ。
「俺に触られていると思えばいい。風呂上がりに拭いてやっているようなものだ。タオルが腹にあたるのは、平気だったろう？　だから少しの間だけ、我慢してくれ」
　どうしても愛想のない口調になってしまうが、それでもトリスの

気持ちは伝わったらしい。
「あい……」
グレンは小さく頷く。
「せんせいとおふろだと、おもいます。おれ、せんせいとのおふろ、だいすきです」
シラクサは「トリス、助かった」と言いたげな目で見る。このまま早く検査を済ませてほしいと思いながら、トリスは頷いた。
シラクサはグレンのあちこちを押さえ、機械を当てた。
そのたびにグレンの身体が、緊張で固くなることが分かる。
宇宙ジャコウネコが乱獲され、密売されるようになったのは、その身体から出て来る媚薬のせいである。
好事家の中には宇宙ジャコウネコを薬で動けなくしてから、不埒な行いをし、媚薬を舐め取るような輩もいるという。
グレンは、そうなる前に飼い主を噛み殺してしまったが、それまでにもいろいろ嫌な経験をしている可能性もないとは言えなかった。
「……よし、終わったぞ。もう腹を触らないからな」
大きく肩で息をしながら、シラクサは言った。
すぐさまグレンは振り返り、正面からトリスに抱きつく。トリスが背中をなでると、ますますしがみついてきた。
シラクサは額の汗を拭きながら言う。
「じゃあ、最後に跳躍検査だ」

3

グレンは肩越しにシラクサを睨む。
「もう、シラクサせんせいの言いなりには、なりませんよう。おれ、ほんとうに、こわかったんだから」
「今度はジャンプするだけだ。お前がどのぐらい飛べるか調べるだけだから、もう触ったりしない」
どんなにシラクサが言っても、不信感が芽生えたグレンは首を縦に振らなかった。
シラクサは困ったような目を向けてくる。
トリスは迷った。
心情的にはグレンの味方をしてやりたかった。
だが検査を全部終えなければ、今度はグレンの大嫌いな「研究所の人間」が来てしまう。そうなってしまえば、グレンにとって――そして研究所の人間にとっても、さらに不幸なことになるだろう。
どうすればいいか考えていると、急にシラクサが目を輝かせる。
「グレン。もしもお前がジャンプしたら、トリスがお前の好物を作ってくれるそうだぞ」
グレンの身体が、ぴくりと動いた。
そっとグレンの顔を覗き見ると、明らかに目が輝いている。力なく垂れていたしっぽも、急に、ぴんと立った。
だがグレンは不機嫌そうに言う。
「でも、おれはだまされませんよう。トリスせんせいは、いつも『お部屋で、はねちゃダメ』っていうんです。だからシラクサせんせいのいいなりになったら、トリスせんせいは『こんなねこ、いらない』っていって、研究所につれていくかもしれません。だから、とばないんですよう」
シラクサは、グレンのしっぽを見ながら、にやにやする。
「いやあ、今日だけは特別だ。跳ねていい日なんだよ。なあ、トリ

ス？　こいつの好物、なんだっけ。すくらんぼーだったか？」
「スクランブルエッグだ」
　トリスは丁寧に訂正する。シラクサは高らかに続ける。
「そう、スクランブルエッグを作ってくれるらしいぞ。あと、マフィンもつけるそうだ！」
「グレンはマフィンよりも、パンケーキが好きだ」
「……だそうだ。パンケーキもつけるってよ」
　グレンは目を丸くして、トリスを見る。
「ほんとうですか、トリスせんせい」
　違うとは言えなかった。
「……ああ、本当だ」
　渋々トリスが言うと、グレンはトリスの身体から離れた。
　そして嬉しげに跳ね始める。
「わーい、すくらんぼーだ！　ぱんけーだ！　わーい、わーい、わーい！」
「まてまて、まだ跳ぶな。計測器の準備ができていない」
　シラクサが準備している間も、グレンは跳ね続けている。
　ようやく計測器を構え、シラクサはスイッチを入れた。
「凄いじゃないか。お前、助走なしで自分の身長ぐらい飛び上がれるんだな。もっと高く跳べそうか？」
「てんじょうに、あたまがぶつかるのは、いやですよう」
「あと三十センチぐらいなら、余裕があるぞ。ちょっとチャレンジしてみろよ」
　グレンはトリスを、ちらりと見た。許可を求めているというより、おねだりしているときの目の輝きに近い。
　トリスは諦めて言った。
「分かった。お前の好きなソーセージも焼こう。長いやつを三本だ」
「うわあああああい！」
　グレンは、さらに高く飛び上がる。
「せんせいが、ソウセージをやいてくれるよう！　えらい人からも

らった、高いソウセージだよう。いちにち一本しか、たべてはだめな、ソウセージだよう！」
「こら、そういうことは言わなくていい」
「ソウセージ！　ソウセージ！」
「おお、凄いじゃないか。新記録だ」
トリスは、ため息のような息を吐いたあと、立ち上がる。
「よかったな……」
グレンとシラクサの楽しげな声を聞きながら台所に立ち、パンケーキのタネを混ぜ始めた。
――検査が無事終わりそうでよかった。
安堵しつつも、結局グレンのおやつを作ることになったのは、釈然としなかった。

3

「うまかったよ、ごちそうさん」
シラクサはトリスのパンケーキとスクランブルエッグを食べて、部屋でのんびりしたあと帰ることになった。結局ソーセージはグレンから分けてもらえず、諦めたらしい。
「シラクサせんせい、さようなら」
グレンは、きちんと挨拶した。トリスはグレンに言う。
「シラクサと話があるから、リビングに行ってなさい」
「あい！」
グレンは、おとなしく言うとおりにし、テレビを見始めた。音声から察するに、いつも見ている科学番組らしい。
グレンに聞こえないように気をつけながら、トリスは苦々しく言う。
「……触診は、もうやめてやってくれ」
シラクサも頭を掻く。
「ああ。俺も死にたくないからな。いい機械を開発して貰うよう、

向こうにも頼んでおく」
「できるだけ早く頼むぞ。お互いのためにも」
念を押すトリスに、シラクサは、ぼそりと言う。
「それにしても――あいつ（グレン）と接するたびに思うんだが、宇宙ジャコウネコってやつは、ねこよりもずっと人間に近い生き物だな」
「喋る時点で、すでに普通のねこじゃない」
「そりゃあそうなんだが……宇宙ジャコウネコが人間の喋る内容を理解し、返事をする生き物だと知っている人間は、この宇宙で案外少ないんだぜ」
そしてシラクサは、不意に目を細める。
「でも、人間に近ければ近いほど助かるな。……俺たちの計画のためにも」
後半は独り言のような小声だった。
トリスは怪訝な気持ちになる。
トリスはシラクサと何か計画を立てた覚えはない。シラクサの言う「俺たち」は、明らかにトリス以外の別の人物を指している。
宇宙ジャコウネコ――グレンに関して、どんな計画が進行しているのだろうか。
トリスが訊こうとしたとき。
「せんせい、ものすごい、いきものが、テレビに出ています！　たまごから、いっぱい出てきているんです。でっかいんです。見てください、すごいですよう！」
シラクサは目を細めて笑う。
「じゃあな。グレンを大事にしてやれよ」
トリスが引き止める前に、玄関から出て行ってしまった。
追いかけて訊こうかと思ったとき。
「せんせい、きょうの晩ごはんは、なんでしょう？」
いつの間にかグレンが真後ろに立っていた。
トリスは呆れて言う。

「お前、あんなに食べたのに、もう腹が空いたのか？」
「いまはだいじょうぶだけれど、きっと夜になったら、もっとおなかがすきます」
確かにパンケーキもスクランブルエッグも、いつもの食事より少なめにした。成長期のグレンは、きっと夜中に腹を空かせるだろう。
「じゃあ夜食用に、これからシチューを作ろう。お前も手伝ってくれ」
「あい！」
グレンは笑顔で台所に駆けていった。
トリスはシラクサを追いかけるのを諦める。
裏でどんな計画が進行していたとしても、シラクサが関わっているかぎり、グレンに悪いことは起きないだろう。
――たとえ何かあったとしても……。
「せんせい、ジャガイモは、何個むきますか？」
「四個だ。ストックから出しておいてくれ。言っておくが、お前が皮むきをするなよ」
「あい！」
トリスは小さく息を吐く。
――俺がグレンを守ってやればいい。
このかわいい、手の掛かる生き物を。
トリスは自分が微笑んでいたことに気付いた。慌てて笑みを消し、真面目な顔を作る。
そしてグレンの待つ台所へと、ゆっくり歩いて行った。
いま一番にすべきなのは、裏の計画について考えることではなく、毎日腹を減らす宇宙ジャコウネコに食事を作ることなのだから。

《終わり》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6525z/

ジャコウネコの身体測定

2011年12月24日02時55分発行